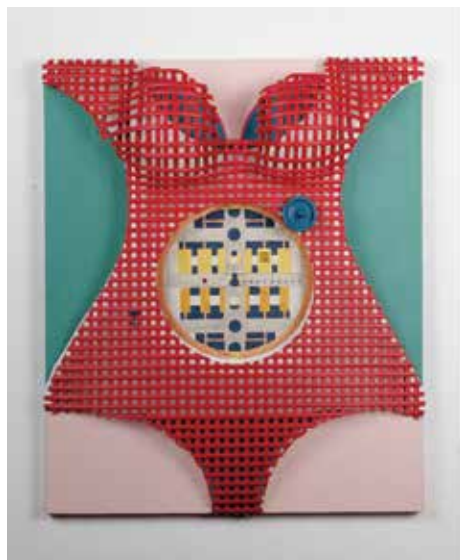
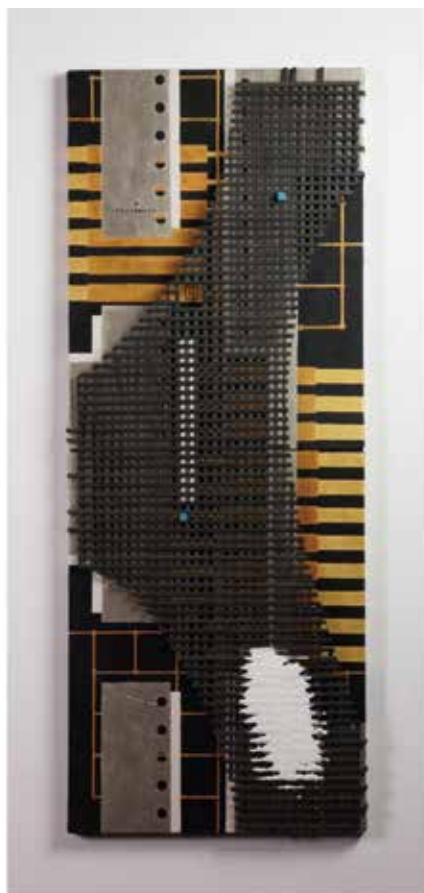


降ってきたイメージを正確に描く 画家・阿部高大の歩みとヴィジョン



JAPANESE SECRET - Android 4

< 女性の中の急激に動くピストン >
her piston moving drastically inside women's body and soul
F8 2014 acrylic on canvas, bamboo, wood
W 380mm * H 455 mm



JAPANESE SECRET - SUKIYA 1

< 日本の家屋の中は機械仕掛けだった >
Mechanism in Japanese house
F6*2 2013 acrylic on canvas, bamboo, plaster, wood
W 318mm * H 820 mm (318mm*410mm each)



TIME LINE 1

< 時空を追う刑事 >
Detective chasing time and space
F6 2011 acrylic on canvas, wood
W 318mm * H 410 mm



生成型AIの爆発的な進歩は、さまざまな表現分野に対しその存立の意味を問いただしている。美術も例外ではない。テーマ、モチーフ、タッチなどを指示すれば膨大な画像データを組み合わせその通りのものを提示してくれるAIは、アートにおけるオリジナルリティとは何か、作家性とは何か―を改めて問い直して

新しく、かつ、根源的な問い。それに対し自身のインスピレーションを信じその具現化を図ることで回答しようとする作家が居る。阿部高大(あべたかお)。「降りてきたイメージを正確に描く」ことを掲げそのためにさまざまなスタイルを採用する。イメージが枯渇することなく次から次へと湧いてくる。「新作展」一年3回、既発表作をテーマごとに再構成するなどした実験的な「特別企画展」を年6回―という精神的なベースで作品発表をしている所以だ。

聴くことは、作家のみならず、美術を愛するすべての人に示唆を与えてくれるかもしれない。

2017年にシンガポールのアートフェア「ART STAGE SINGAPORE 2017」に参加した際、現地の方々の観客から「カミンソリのような緊張感がある」と言われた。出品作『JAPANESE SUKIYA 1』はカンヴァス上に竹を精緻に組み合わせた半立体作品。スタイリッシュでありながら画面に力が漲っている。こうした細部も含めイメージは明確な形で降りてくるという。

「イメージが降りてきて、それを出るだけ正確に描きたいと思っています。もちろん描くのは僕だから、僕の色は出てしまうのかもしれないけど。だから、難しいアート哲学は語れません。でも、自分なりのアートのテーマとしては、目に見えない大切なものや、宇宙や森羅万象の追求を作品にしたいと考えていま



METALICA 1

<原発事故を忘れない>
we always remember Fukushima's nuclear accident.
P4*18 2018 acrylic on canvas, wood
W 1998mm * H 660 mm



「す」
「イメージが降ってくるのは、なぜかはわからないのですが、そのイメージを忘れないようにスケッチして、見えたままを描くというスタイルです。イメージを描き留めたスケッチを見せてもらった。微細に描き込まれた小さな紙片は、既に完成作とほぼ同じフォルムを成していた。作品タイトルは描きあげた後に付ける
「いつ思いつくかわからないのですから、眠っていてもすぐに起きてスケッチする訓練をしましたが、サボって朝まで寝てし

まうと忘れちゃって悔しい思いをするからなんですけど、食事の最中でも、遊んでいても、思いついたら、どんな状況でもスケッチします」

1972年生まれ。1991年に渡米しリオ・グランデ大学で美術を学んだ。

「なぜアメリカかというところ1940年代から1960年代のミッドセンチュリーモダンの世界に憧れたから。でも行ってみたら違った。ローラースケートでチョコレートシェイクを運んでくれるダイナーは無かったんです。時代が違うのだから当たり前なんですけど、ちょっとがっかりして、でも、勉強するうちに、パウハウスの存在を知りました。戦前から現在でも通用するようなデザインやアートをやっていったのか、と感動しました。また、パウハウスでは、建築を学ばないと一流の作家になれないという思想があったということ

を

知りました。夢中になりました」
「建築やインテリアを学び、実際にデザインをして設計して建ててみたのですが、そこに飾りたいようなピタリとイメージに合った絵を手に入れることができずしてしまいました。マーク・ロスコやビート・モンドリアンなどは高すぎて買える金額ではありませんでした。息づかいが感じられる原画を飾ってほしかったんです。だから、アートの戻って自分で描くことにしました」

「数十点を夢中で描いて、2010年に銀座のギャラリを借りて初めて個展をした時、ほとんどの絵が売れて手ごたえを感じました。それがアーティスト活動の始まりでした」

「それからは、とりあえず皆がやるように公募展に出品し賞を取ったりもしましたが、何も変わらなかった。企画ギャラリーにも話しに行きましたが、年に12回しか企画展をやっていないのに所属作家が20人以上居るとか、創る作品をギャラリーが指定してくるところまであります」

た。それでは食べていくことだっでできませんし、創る作品まで決められてしまっでは、アートじゃなくてクライアントのいるデザインと同じになってしまうのではないかと悩みました」

自身のイメージをそのまま描き留めたいという思いは、いつしか、鑑賞者にそのまま手渡したい、との思いへと広がっていった。「2017年に仲間達が僕の作品を扱うギャラリーを作ってくれました。それがFujii GALLERY 名古屋、Fujii GALLERY 横浜です」。今年に入って自身が運営する「TAKAO. A GALLERY」も大田区田園調布にオープンさせた。
「手に入れてくれる人々が後から良かったと思ってもらえたらいいなと走ってきました。でもそれは僕がアーティストとしての責任のように、ひとりで焦っているのかもしれない」

「新作個展をFujii GALLERYで年に3回、実験的な特別企画展をTAKAO GALLERYで年

戦前までの日本は床の間に掛軸が飾られるなど美術品が生活のそば近くに在ったが、現在ではそうした美風が失われてしまったと嘆く。「戦後80年近く経って、焼け野原から復興して、見た目は立派になったから、次はそろそろ心や大和魂を取り戻す時期になってもいいのではないかと思ったりします」

「今、世の中がおかしくなっていて、きな臭くて、ちょうど戦前の日本のような状況なのかもしれない。そんな中で、僕らのつむぐアートに心や脳や魂が揺さぶられ、手にしてくださる方が居て、僕やギャラリー関係者が生きていけることに心から敬意を持っていきます。誰かがそんなふうにしてアートをつむいでいかないと、後から続いてくれる人々が希望を持ってアーティストになることができなく



EXIST 2

<存在する事象> Existing things and events
F50 2023 acrylic on canvas
W 910mm * H 1167 mm



EXIST 1

<存在する事象> Existing things and events
F50 2023 acrylic on canvas
W 910mm * H 1167 mm



MINAMO no UTA 5, 6

<波が歌を唄う>
waves sing a song
F10'2 2021 acrylic on canvas, wood
W 530mm * H 455 mm *2



阿部高大 (あべたかお)
1972年生まれ。リオ・グランデ大学美術専攻(1991年-1995年)中退。2023年大田区田園調布にて「TAKAO.A GALLERY 田園調布」開設。2017-現在 Fuji GALLERY 横浜本店・名古屋の2カ所にて年3回の個展。

TAKAO.A GALLERY 田園調布
東京都大田区田園調布 1-21-3
アカデミアクリティコビル1F
<https://www.takaoabe.com>
「阿部高大」で検索

Fuji GALLERY 横浜本店
横浜市中区常磐町 5-72-1
GM 横浜馬車道通ビル 5F
045-662-7707
<https://www.f-ujigallery.com>
「フジギャラリー横浜」で検索

Fuji GALLERY 名古屋
名古屋市中区栄 3-19-19
フォルテ栄ビル 3F
052-241-0212
<https://www.f-ujigallery.com>
「フジギャラリー名古屋」で検索

*いずれも予約制



CHERRY and MOON 2 - THE TRUE STORY

<桜が咲く夜の宴会から見える借景>
borrowed scenery seen from the evening banquet with cherry blossoms
P10 2021 acrylic on canvas, wood
W 410mm * H 530 mm



RAIN IN KYOTO

<雨の日の京都の雰囲気>
F80 2019 acrylic on canvas, wood
W 1455mm * H 1120 mm

なってしまうのではないかと
思います。だから僕は命ある限り
描き続けます。そうでなければ、
戦争中の規制で描きたいものを
描けなかったアーティストや天
安門事件で亡くなったアーティ
ストに申し訳ないという気持ち

もありません。今は、自由に、何
を描いたって、牢屋に入れられ
ることはないのですから」
描くことが自身の癒しにも
なっているという。「本能的に描
くことが大好きなんだろうね。」

だから、毎日、毎日、お百姓さ
んのように、絵を描きます。描
いていて、描けることが幸せで、
嬉しくて仕方ありません」
「たくさんの方々が僕のアー
トを持ってくださっているから
後々の世まで作品が残る可能性
があるのではないかと思います。
だから、おじいちゃんから孫に
アートが贈られる時、ダサイか
ら要らないと言われぬようにに
したいと思って描いています」
「アートとは永遠性なのだけ
ら、時代を超えた存在でなければ
いけないよ。僕はアー
ティストとして後世に渡って、
死んだ後もその責任を背負って
います。作品を生み出して皆様に
持っていただくというのは、
そういうことではないかと思
います。ただ、描きたいものが無
限に思いつくタイプなので、重
圧に耐えられないということも
ないので助かっています」

る存在だということです。東京
だけでなく、日本だけでなく、
世界だけでなく、地球だけでは
なく、宇宙にまで意識を広げる
ようにして見るようにしていま
す。例えば、宇宙から他の知的
生命体が地球に遊びに来た時、
戦火が上空に見えたなら怖くて
引き返してしまうのではないか
と思うんです。そう考えると、
戦争はよくないという当たり前
のことだけではなく、みっとも
ないとか恥ずかしいという感覚
になるのではないのでしょうか。
僕はそうした視点で宇宙まで意
識して描いています。世の中
には理屈では語れないことがた
くさんあって、まだ我々は知ら
ないことがいっぱいあるのでは
ないでしょうか」
「理屈抜きの素晴らしきこと。
誰かを好きになるとか愛とか、
気持ちとか。森羅万象の不思議
とか。アートに心や脳や魂が震
えて何か感じるとか、目に見え
ない素敵なものごだれほどたく
さんあるのだろう。それを表現
したいと思っています」